

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

いのちの実感 仙台司教 佐藤千敬

コミュニケーション委員長 カトリック新聞社運営委員長

カトリック教会は、いつの時代においても、《いのちの尊さや大切さについて説いてきました。新しいところでは、教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅「真理の輝き」や「いのちの福音」、また教理省の「生命のはじまりに関する教書」などがあります。

だが、ここでちょっと考えて見たいことがあります。それは、教会の教えはキリスト者としての信仰を前提とし土台としていふということ。つまり、キリスト者の世界ではよく理解されていて、キリスト者以外の人にとつてはどうか、ということ。キリスト者の垣根の内では認められていないものでも、垣根の外では必ずしもそうではないのです。生きとし生きるものすべ

てのいのちは、《神のいのちの分与》であるからこそ尊いのであり大切にしなければならぬ、とキリスト者は確信しています。しかし、キリスト者の垣根の外の人々は、創造主である神も認めず、人格神を認めていないのです。日本の場合、キリスト者は極く少数

であり、大部分の国民はキリスト者の信仰に縁のない人々なのです。そのような状況の中で、教会の教えを解説し、宣べ伝えることは大切なことですが、それでは何か足りないように思います。

現実の世の中には、いのちを全く無視した出来事が日常茶飯事として起こっています。

暴力行為や人殺しがあつたりまえの事であるかのように報道され、凶悪犯罪

の低年齢化など聞くに耐えない事件が頻発しています。このような世相だからこそ墮胎天国日本と言われるほどの人工妊娠中絶が横行しているのではないのでしょうか。

このような現象が一般化しているそもその原因はどこにあるのだろうか、と考えずにはいられない。それは要するに《いのちの実感》がないからではないか、と私は思います。人間は知性をもつても、のちを理解、判断、意志の力で行動に表わすと言われますが、この世の荒波に生きる現実の人間は必ずしも理論通りにはいかない。むしろ、何らかの出来事があつて、いのちの尊さや大切さを実感させられるときはじめて納得し、理解し、受け容れるの

だと思えます。例えば、何らかの理由で、不幸にして人工妊娠中絶をした女性が、はじめ、しみじみといのちの尊さに気づいた、という話はよく聞いたり、読んだりします。書物や人の話で見たり聞いたりして頭に入っていたことが実感として追ってくるのです。

天地の創造における神の働きは、一木一草にも動物のすべてにもわたるのですが、日々のテレビの映像には、いのちを無視したような場面があまりにも多過ぎるようになってしまふ。たしかに、弱肉強食の連鎖によって生物のいのちは保たれ、伝えられていくのですが、そのような動物界の殺し合いの映像に慣れすぎた現代の青少年の心には、いのちの尊さなどとは思っても及ばないこととしようし、人と人との殺し合いについても何ら心に痛みを感じなくなつ

てしまつたのでしょうか。

このような風潮が一般化している世の中でキリスト者はいのちの尊厳について宣べ伝えてゆかなければならないのです。ですから、例えば、性教育においても、人間のいのちのある部分を断片的に切り取って解説するだけではなく、受胎の瞬間からこの世を去る最後の瞬間までの連続した生命の営み全体を視野に入れ、さらに動植物全体の生命とのつながりで示されなければならぬでしょう。幼少年期から草花の美しさを感じる感受性とか、小さな虫たちをいとおしむ心が育てられてはじめて、生きていくことの有難さを感じ、人生におけるいろんな出来事を通して体得する『いのちの実感』が得られるのではないのでしょうか。そうして、『いのちの福音』も納得され、受け入れられるでしょう。

自殺援助の合法化のどこが悪いか

A。自分を殺すという判断は個人的な選択権であり、それに社会が関わる権利などない、という意見が多数ある。

自殺というものは、判断力のある人が死ぬにあたって自主的で論理的な判断をした結果である、この意見は仮定しており、自殺する本人以外の誰も傷付けることのない、この生きるか死ぬかという自由な選択に、社会が「口出し」する資格などない、と主張しているのだ。しかし自殺の研究の専門家達によると、その基本的な仮定は間違っている。

一九七四年に行われた、多方面にわたるインタビューと医療記録の調査をしたイギリスの研究で

によるものではないのである。

自殺未遂は、その人が立っている苦境に多くの関心を引き付ける。周りの人間らしい反応としては、精神医学や社会に於ける助力を活性化し、自殺者をそんな極限まで追い詰めてしまった原因を引き出す事である。特にこのカウンセリングと援助は効果的である。自殺未遂だった人のケースの内、五年後までに再び自殺を試みたのは、たったの3.8%だったという結果がある。スウェーデンの研究では、36年後まで見届けた結果、10.6%が再自殺しただけだった。矛盾した事に、自殺を試みたのを止められ助けられた人の方が、同じ問題を抱えながらも自殺をしない人よりも、幸せな人生への期待が大きいのがほとんどである。

B。それでも、その個人の自由ではないか？

ほとんどの場合、自殺を
する理由は助けを求め
る無意識の叫びとして
あり、死が生きるより楽
だと注意深く計算された

ではなく、彼等の問題を解決してあげるのが大切なのである。

C。不治の病の人の場合は？

アメリカ精神医学ジャーナルに載った不治の病を持つ人達の科学研究では、世間の人達が思っているのに反して、四人のうち一人未満しか死にたいと願っておらず、そう思う人のすべてが臨床上診断しうる鬱病だった事がわかった。心理学者ジョゼフ・リッチマンが指摘するように、「効果的な精神療法は不治の病人に對しても可能なのに、不合理な偏見だけが、この処置に頼るのを阻んでいるのである」。そして自殺学者のデイヴィッド・クラーク博士が観察した結果、不治の病の鬱病患者は、他の鬱病患者と比べても、「薬物治

療がより効かない、という事はない」のである。実際、不治の病を持った人の自殺率は、たったの2%〜4%である。医学と心理学に基づいた看護と共に、多くのホスピスで提供されているような親身のカウンセリングと援助を行う事によって、不治の病を持つ人々の間で、案楽死に代わる別の前向きな選択が出てくるのである。

D. 耐え難い痛みに苦しむ人の場合は？

その人達は適切な医療処置を受けていないので、最新の鎮痛剤を投与されるべきであって、殺されるべきではない。オランダにおける安楽死を合法化する為の最も盛んな運動のリーダー、ピーター・アドミラール博士でさえ、事実上どんな状況でも痛みに対処できる現代の医療技

術をもってして、痛みが安楽死を適切に正当化する事は決してない、と公表している。

それでは何故、病院や療養所で、耐え難い痛みと戦わなければならない人達の話が後を絶たないのか？それは悲しい事に、医療の最前線では完璧となっていない痛みに対する技術も、そのすべてが臨床のレベルまで到達してはいないからである。必要なのは、診察にかかわる人達を、その面で再教育する事なのだ。医師の援助による死の合法化ではなく。

E. 重度の障害を持つ人の場合は？

私達が不治の病も障害もない自殺希望者に対して「死にたいと言うが、あなたに必要なのはカウンセリングと援助だ。」と言っておきながら、同時に

障害を持つ人に何故あなたが死にたいか気持ちのわかるから、医者にあなたを殺させよう。」ともし言ったら、私達の社会の態度としてどうであろう？明らかにそれでは障害を持つた人の「選択の自由」を尊重した事にはならない。逆に、障害者における自殺力ウンセリングを、差別から否定した事になるのだ。障害のない人に「あなた達の事が大切だから命を失って欲しくない」と言っておいて、障害を持つ人には、障害のある人生は生きる価値は無い」と言うのと同じである。

国民生きる権利の会

れみが、人生を耐え難いものにしていくのである。障害を持つ人の権利を心から尊重する事が、この様な壁を取り除く手だてになるのである。・自殺の「援助」ではなく。

食べ物と水を与えない事

A. 現在最も一般的な安楽死の方法は？

食べ物と水を与えない事。

B. どの様に食べ物と水を与えないのか？

安楽死の「第一候補者」は反応する事が出来ない人である。(昏睡状態の人や永続的植物状態の人。)この様な人達は食べ物の摂取に補助が要る。この場合、二つの内どちらか一つの方法が取られる。一つ目は、その人が病院のスタッフや家族に、手から食事をさせてもらっている場合。この場合、栄養の供給を止めるのは、単に食事させるのを止める事である。二つ目は、その人が管で栄養を取っている場合。それは細

いチューブで、鼻から、あるいは手術によって皮膚に穴を開け、胃に直接通してある。この場合、このチューブを取り除くことで栄養は供給されない。

*便秘

*腹部の痙攣、吐き気と嘔吐

*鬱と混乱を含む情緒異常

*妄想

*泌尿器と内臓の感染症

*気管支炎と肺炎

Ohio Right to Life News

C.死ぬまでどの位かかるのか？

人は普通食べ物なしで、

約40日間生き延びられる。

肥満した人は、脂肪細胞が

少しづつ分解して栄養となる為、長く生き延びる。

水を与えない場合、人は

もっと早く死に至り、健康

状態や体力によるが、三日

間から十日間で死ぬ。

時にはある。例えば、内臓の癌にかかった人である。しかし、安楽死を考えている人に食べ物を与えても、苦痛になったり、死期を早めることはない。

時にはある。例えば、内臓の癌にかかった人である。しかし、安楽死を考えている人に食べ物を与えても、苦痛になったり、死期を早めることはない。

D.食べ物と水を与えられないと、人はどうなるか？

次の症状が典型的な死の前兆候である：

*口、鼻、喉、生殖器の粘膜が乾く。

(普段でも、暑い日の重労働の後など、ひどく喉が

乾いた時は、この第一段階である。)

*腹部の痙攣、吐き気と嘔吐

*鬱と混乱を含む情緒異常

*妄想

*泌尿器と内臓の感染症

*気管支炎と肺炎

家族や友人が見なくても済む様に、手はずを整える。これは安楽死を認可した人達にも関わる事なので、例えば患者が痙攣を起こさないように薬を投与したりする。

安楽死にかわる方法とは？

安楽死に代わって私達が採りうる真の方法とは、死にゆく人に愛情あふれる十分な看護を与えることでしょうか。イギリスでは、末期医療に対する新しい概念が生まれ、末期患者へのケアと技術を専門にするホスピスというシステムが生まれました。この概念はカナダ、米国へと広がり、急速に浸透しています。「自分が歓迎されていて他人の重荷になっていくのではない」と患者が感じ、苦痛がコントロールされて他の症状も軽減されると、安楽死を望むことはなくなります。安楽死が正しいか正しくないか、望ましいことか望ましくないか、または現実的な解決法なのかそうでないのか、それらが問題なのではありません。安楽死は、不適切なのです。末期患者に対す

Ohio Right to Life News

聖書には安楽死について

どのように書かれているか

聖書は、最近盛んになっている「生きる権利」と「死ぬ権利」についての論争に明確に答えています。聖書には命を尊重することに開く原理が含まれていないばかりでなく、聖書にある一節には「安楽死」のことが書かれています。

安楽死は現代の社会にとつての関心事であるばかりでなく、古代の人々にとつてもまたさうであったのです。道徳的な問題は全く変わっていないのです。変わったのは安楽死の方法だけなのです。旧約聖書のサムエルの書、下(一章1-15)には「安楽死」に関する神の考えが述べられています。サムエルの書にはダビドが王になる直前に、ある戦場で起こった事件が書かれています。

人の話を聞いてみましよう。その若者は次のように言いました。「たまたまギルボアの山にいますと、サウルがやりに寄りかかり、

戦車と騎兵に取り囲まれているのが目に入りまして。サウルはふりむいて私を見つけ、呼びかけました。私は「はい」と答えました。サウルは おまえは何者だと私に聞きましたので、私はアマレク人です」と答えました。すると彼は、私に近よって殺してくれ。目まいがする。私の命はまだ絶えていないと言いましたので、私は彼に近づいて殺しました。彼は倒れてもう長くはないと思つたからです。」

ました。疑いもなく、断末魔の苦しみは大変なもので、またペリシテ人の手にかかつて拷問を受ける可能性は大でした。もし神が「安楽死」の長所を教えようと望むなら、この場面が理想的でしょう。しかし私達はここでそれとは反対の教訓を発見するのです。

彼らは、人が生き延びることができない時には、避けることのできない死の苦しみを減らしてあげようという人間の心のより崇高な動機に訴えるのです。三千年たつてもその論理は変わらず同一なのです。

(A) 同一の論理

サウル王を殺したアマレク人の理論的根拠は今日の安楽死の擁護者のいう理論的根拠と同じです。彼は、王が生き延びることができなかつたので王を殺したのです。「アマレク人は功利主義的な論理を用いました。そしてそれは、私は苦しみを取り除くために殺した。」ということを意味しています。安楽死の擁護者は死を早めることを求めて美徳とか慈悲とかに訴えます。

サウル王を殺したアマレク人の理論的根拠は今日の安楽死の擁護者のいう理論的根拠と同じです。彼は、王が生き延びることができなかつたので王を殺したのです。「アマレク人は功利主義的な論理を用いました。そしてそれは、私は苦しみを取り除くために殺した。」ということを意味しています。安楽死の擁護者は死を早めることを求めて美徳とか慈悲とかに訴えます。

(B) 聖書の考え方

ダビドの反応の仕方によつて私達はこの事柄についての神の考えがわかります。

まず、この人類全体の敵に対して、イエスと同じようにダビドとその部下が死に反心したこと。つまり彼らが涙を流して泣いたということに注目しましょう。彼らは、王とその軍が滅ぼされたということを聞いた時、悲しみを正直に表したのです。(11節、12節)ダビドと部下は、どのようにしてサウル王を

殺したかを自慢したアマレク人の功利主義的な態度とは対照的に、真の人間らしさを表に出したのでした。

次に、ダビドはその男の言葉に基づいて、そのアマレク人を公正に裁きました。もつともその男の述べたとおりはその事件が起こったかどうかについてはかなり疑わしくはありますが、サムエルの書上の最後の章には、実際にはサウル王は自ら命を絶つたということが示されているようです。そのアマレク人はおそらくギルボア山にたまたま居合わせた戦場の略奪者か、勝った方の側に取り入ろうとする傭兵のいずれかであったのでしょう。

おまえは自分の口で自分に判決を下したからだ。」(下1章16節)とダビドは言つて、そのアマレク人を処刑させたのです。

ダビドの取つた行動は正しかったでしょうか。聖書には、この件でのダビドの行動に対する非難を暗示するものは全くありません。ダビドはやがてイスラエルの王になる運命にあつたのですが、裁判官としての役を果たしました。彼の態度と反応は神の心を表しています。

ダビドはイエスと同じように、死を嫌悪し死を大きな敵として、そして悲しむべきものとして取り扱いました。私達はまた、ダビドが新しい王として裁判官の役目を果たし、先王の殺害者を処刑したことがわかります。

聖書は再三再四、神が命の創造者であるという事実、実に焦点を当てています。聖書の初めの部分の第二

法の書4章39節の中で神は、私以外に神は存在しない…私は殺し、そして生き返らせる。」と言われています。それから聖書の最後の方で、神は「私が死と黄泉の鍵を持っている。」ヨハネの黙示録1章18節)と述べてそのことを再確認されています。神は、命の始まりと終わりを決定する権限を手中に納め、死刑に値する犯罪の場合以外(創世の書9章6節)、その権限を人間の手に渡したことは一度もありません。

法(創世の書9章6節)と述べてそのことを再確認されています。神は、命の始まりと終わりを決定する権限を手中に納め、死刑に値する犯罪の場合以外(創世の書9章6節)、その権限を人間の手に渡したことは一度もありません。

(C) 安楽死に対するキリスト教の考え方

もし、聖書のこれらの章の中で、キリスト教徒が見習うべきことがあるとすれば、それはサウル王の従者の取つた態度です。サウルは従者に言った。「剣を抜いて私を殺せ。あの無礼の者どもになぶり殺し

されるのはごめんだ。」だが従者はふるえ上がってそうするのを拒んだ。サウルは自分の剣をぬき、その上に身をうつぶせにした。(サムエルの書上31章4節)

王から、最後の安楽死の一撃をふるうように命令された時、従者は拒みました。従者として、どのような犠牲を払つても王の命を守るのが彼の責任でした。したがって、サウル王を殺せという命令を直接王自身から受けても、彼は拒んだのでした。

「どうしておまえは向こう見ずに、主に油を注がれた者に手をあげて殺したのか」とダビドはアマレク人に尋ねました(一章14節)。従者は恐れ命を尊びましたが、アマレク人はそうしませんでした。

(D) 苦しみという鍛練の場

それでは神の慈悲とは何なのでしょう。か。善良な神は人々がむだに苦しむのを望みないのでしよう。この種の問いは私達が持たない全知を前提としていません。いくつかの例を考えてみましょう。どうに人は女性が出産の時に経験する苦痛に対応するのでしょうか。私達はこの苦痛が一時的なものであり、またそれが本当にすばらしいもの、つまり新しい命をこの世の中にもたらすためのものだということを知っています。女性もこのことを知っています。だからこそ、その苦痛に耐えることができるのです。しかし、もしその女性が精神的に障害を持ち、今味わっている苦痛の理由が理解できなければどうで

しょうか。彼女がそのことが理解できなくても事實は変わらないでしょう。その事實とは、その苦痛は一時的なものであり、よりすばらしいもの、つまり新しい命のためだという事実なのです。

「不必要な苦しみ」ということになる、人間全体も同じような立場にあるのです。私達は神が行なっていることが常にわかるだけの信仰も知識もありません。もし仮に誰かが「不必要な苦しみ」を経験している人を安楽死させることを提案すれば、神はこのように答えられるでしょう。「苦痛は一時的なもので、私がこの人間の魂のなかで成そうとしている大いなる善のためである。」と。

私達は信仰のハンディキャップに苦しんでいません。神は私達が理解できない時でも、自らが行なっていることがわかります。

苦しみという鍛練の場を耐えぬいた人々は次のような教訓を理解できるでしょう。苦しみは私達を

神のそばへ導き、私達の中に神に対するさらに大きな信仰と信頼を起させてくれるのです。苦しむことによって現世への執着から逃れ、永遠のものに精神を集中することができます。神は、私達が求める全てのものに対して十分な慈悲を与えることを約束して下さいました。私達のために苦しむよう御子をつかわした時に苦しまれたように、神は私達が苦しんでいる時私達と共に苦しんでおられます。これらの事実と、私達が苦しんでいる時に、神が私達の魂のなかで何を成就させようとしているかを私達が全くわからないという事実を考慮すれば、私達は命というものを崇敬し続けなければなりません。聖書には神から与えられ

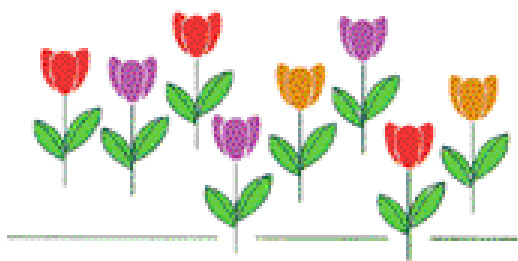
た命を大切にし、神に死の時を委ねる以外のことは書かれていません。

聖書は命を大切に守り、神自身が造られたものを尊ぶよう、キリスト教徒にくり返し求めています。胎児の生きる権利を支持している聖書のなかの全ての言葉は「死ぬ権利」に反対しているのだと解釈できます。アマレク人は思いやりという美名のもとに、軽率にも命を奪ってしまいました。従者は死の時を神の手に委ねることを選びました。

キリスト教徒は、神が命の創造者であり、神が生と死のかぎを握っていることを世界に宣言しなければなりません。神が最終的な権限を持っているのであって、人がいつ死ぬかを決定するのは、私達の権限ではありません。キリスト教徒は苦しみに直面しても慈悲深い神への信仰を恥じることなく宣言する

ことができます。苦しみは「死ぬ権利」を認める法律を制定するための理由ではなく、全てを知り、慈悲深い神へのさらなる信仰を求める理由なのです。

ウィリアム・T・ミラー



「いのちの福音」の教えを生きる

「教会同様、家庭も、いのちの福音を示し、祝福し、また仕える場である。まず、結婚している夫婦にその責任がある。…新しい生命が誕生する中で、両親は、子どもが夫婦みずから生み出した自分達への贈りものであることを知る。」(「いのちの福音」No.92)

「いのちの福音」において、ヨハネ・パウロ二世は数回にわたって家庭を人生の聖域として述べています。この言葉を考えるまでもなく、男性と女性に与えられた創造という行為に参加する能力が、神から授けられる贈り物であることがわかります。受精によって生まれる個々の小さな人間こそが、「世界における神のあらわれで

あり、存在の証です。(No. 34)

では、今日の社会で、なぜ多くの人が避妊法を励行するよう洗脳されてしまっているのでしょうか。

それが、実は薬品や器具を使った中絶にほかならないというのに。多くの人が、人工的に避妊すると同時に、エイズを含めた性病の危険に自らをさらし続けているのはなぜなのでしょう。

これらの答えも、「いのちの福音」の中にあります。人から神への恐れが失われると、「世もまた主体性がなくなり、搾取される。愛の証であり、表現であった性が、個人の欲望を勝手に満たすだけのものになってしまふ。そして、人間の性の真の意味がねじ曲げられ偽られ、結合と生殖という夫婦間の営みの本来の二つの意味が、人為的に切り離されてしまふ。」のようにして結婚の

絆は裏切られ、その実りは夫婦の気まぐれに任せられてしまふのである。そこでは、生殖は性的活動にとつて避けるべき敵となる」

(No. 23)

現代社会におけるこれらの誤りを正すために、私達はまず、家庭こそ小さな教会であり、その中の言動全てに神の愛の真実や感謝が現れることをはつきり認識すべきです。私達が持つ、あるいは希望する子どもの数に、言い訳があつてはなりません。避妊を促すような行動や態度を示してもなりません。そういう考えた考えは、手術や薬品による中絶をさらに増やす恐れがあるからです。

恐らく、両親として、祖父母として、あるいはこれから親になろうとする若者として最も大切なことは、愛と命という神からのメッセージに對しますます冷淡になつていゝこの世の中で、神の手足となる

ための不屈の精神と知恵と栄光を求めて祈ることでしょう。家庭とは庭のようなものです。美しいけれど常に利他的な愛と犠牲を必要とします。これは中絶反対運動に20年以上も携わつてきた経験から私達が確信していることです。が、もし神のみ心通りに家庭を復興させることができたなら、この死と隣あわせの避妊社会を変えることができると思ひます。

それは不可能でしょうか？ いいえ！ 難しいことでしょうか？ ええ！ 必要なことでしょうか？ もちろんです！ でも、その成果を考へてみて下さい。さあ、今すぐ、そしてこれからずっと、愛する人々とこの希望のメッセージを分かち合つて下さい！

ジュディ・ブラウン



11月

Pro Life Hero

戸野部真理子さん（プロ・ライフ・ニュース13号に記事を書いて下さった方）は秋田で育ちました。聖霊高校の時、洗礼の恵を頂き、その頃、親戚の方が中絶を経験したのを知り、心が痛んだと言われていゝます。将来の進路を決める時期に命にかかわる看護婦の道を歩もうと決め、日赤等の看護学校に進めば、実習などで人工妊娠中絶に関わらなければならぬいかもしれないけれど、カトリック病院なら、中絶に関わらなくてもいいだろうと思つて、名古屋の聖霊病院の看護学校に進学されたようです。

御結婚後、6人の子どもの育見におわれていゝましたが、6人目のお嬢ちゃんが生まれて、3週間目にご主人を病気で亡く

してしまいました。その頃通っていた教会でプロ・ライフ・ニュースを手につけたのがきっかけでこの運動に出会ったといわれます。その頃のニュースのサブタイトルは今のよう

に胎児を守る運動ではなく、中絶反対運動とはっきり謳っていて、中絶の事を聞くときに痛みを感じるから、そして、このニュースに出会ったことは呼ばれていると思う、事務所に連絡を下さり、89年4月から50部ニュースを配って下さるようになりました。聖霊病院や聖霊幼稚園、南山教会やロゴスセンターや南山短期大学等にニュースを置いてくれるように話してくれたのですが、相手からは全員がカトリックではないからと断られることもありましたが、ロゴスセンター等、ニュースよく置いて下さるところもありましたと話されていきました。

今、子どもさん達と生活の為に朝から晩まで働かなければならなくなりました。それでも、10部ニュースを配り続けてくれています。

東山公園などで若いカップルを見かける時、また、産婦人科医院の前を通る時、子どもを殺さないでと思わず祈っています。それに、マスコミなどで番組を通して、胎児は人間と報道してくださればよいのにとおもいながら、今は、子供達やその友達におなかの赤ちゃんよと、若い生命セットの人形を見せたり、「あかちゃん：最初の10ヶ月の旅」の本を見せながら、子供達が大きくなって、いつの日か自分の時間が持てるようになったら、もっとこの運動に関わりたいたいとおっしゃられました。

明るさと暗闇・・・

共通点はない

一人一人の無垢な人間の命を、法によって完全に保護する一例外なしに！

これは我々の社会の中の、すべての無垢な命に対する尊敬の念を取り戻す為の原則である。それは日本の法律においても、生きる権利に対する尊重を取り戻すものである。最も重要

である生きる権利(他のどんな権利よりも価値ある権利)は、どの人間も、受胎(新しい命を作る為の精子と卵子の結合)の瞬間から持っているものなのだ。

もしその人間そのものに問題があるというなら、その人間は他のどの権利よりも優先されるべきである。生きる権利は持てないというなら、彼等を中絶したり、不妊にしたり、あるいは致命的な薬品や策

略を以て、やっつけてしまつていいだろうか。より良い社会を作る為にと言つて、ある一定の人々を虐げたり排除する事を許す態度は、人口調整を合法化するのと同じである。強制的に女性を不妊にしたり中絶させる、中国の様な国を止める手だではあるだろうか？人口調整とは、生きる権利を否定する態度や政策の結果なのである。

国の力として、中国政府による人々への迫害は、「選択」の偽善性を明らかにした。子どもを中絶する「選択」。殺すという選択は望まれ、代わりに産むという選択は眉をひそめられ、思いとどませられるのは、明白である。このよく見られる考え方は、非常に危険で、我々の周りの暗闇を表わしている。

無垢な人々に対する我々の保護は、首尾一貫していなくてはならない。キ

リスト教の教義にのっとり、神こそがすべての人間の創り主であるとする我々は、今現在では負けと見える戦いも、いつかは神によって決定的な勝利、法による完全な保護...を勝ち取るのだという事を、忘れてはならない。しばしば、中絶反対への政策が思うように行かず、いらいらさせられることがあつても、将来は必ず、神の真理が勝利することを覚えていよう。

政治、教育、妊娠カウンセリング、又は非暴力的直接運動においても、「明るさと暗闇には共通点はない」事を忘れてはいけません。そして死の社会が作り出した暗闇は、立ち上がって真実を口にしようとする我々によってのみ、正せられるのである。

ノボトニー・ジェリー